

蒼と紅〔1〕

麦（穀物P）

目次

登場人物		4
第一章	紅蓮の先輩	6
第二章	運命の蒼に、思い焦がれ	24
第三章	ミニmam・ブルー・シンドローム	42
間章	僕の姉さんと、その友達らしき人について	78

登場人物

主人公・蒼 ヴィルシーナ

三姉妹の長女。みんなのお姉ちゃん。ジェンテイルドンナのことは変わった先輩だと思う。

主人公・紅 ジェンテイルドンナ

剛毅なる貴婦人。実は妹キャラでもある。ヴィルシーナが大大大好き。大好き過ぎてヘンになっている。

トレーナー・蒼 都築楓（つづきかえて）

ヴィルシーナのトレーナー。名前が紅つぽい。藍の後輩。気になる生徒をストーカーまがいの行動で観察して毎回理事^{たづ}長秘書^{なさん}に怒られている。

下僕（トレーナー）・紅 鹿島藍（かしまあい）

ジェンティルドンナの下僕。名前が蒼つぽい。楓の先輩。

相談所長（トレーナー） 白江亮（しろえりょう）

ゴールドシップが所属するチームのトレーナー。ゴールドシップの差し金で学園のなんでも相談所的なことをやらされている。

ゴールドシップ ゴールドシップ

ゴールドシップ。ジェンティルドンナと同じクラス。ジェンティルドンナを茶化し過ぎて制裁を受けがちだが、たまに鋭いアドバイスをする。

第一章 紅蓮の先輩

『今年デビュー予定の生徒達は強豪になりそうな子が多い。しかしクセモノも多い』

さまざまな名記録、珍記録、トラブルが記録された『魔の選拔レースウィーク』から一か月経った五月下旬、毀誉褒貶きよほうへんがない交ぜになった評価は私のところにも聞こえてきた。その選拔レースのひとつを突破した一人ではあるけれど、クセモノと一緒にたにされるのは遠慮申し上げたい。

「ふっ、ふっ」

「はいそこまで！……バイタルから見た心肺機能は上々ね。少し上向き始めたところと言えるかも。疲労感はどう？ ヴィルシーナ」

先月トレーナー契約を結んだトレーナー——名前は都築楓^{つづき かえで}、二十代ヒト女性のトレーナーが、手に持ったタブレットから視線を上げて尋ねてきた。

「以前よりもまた少し、疲れにくくなった気がします」

「よし。ティアアラ三冠を目指すならオークスの距離に対応できるようにしないといけないから、心肺機能とスタミナはまだまだつけていいくらいね」

「なるほど」

クールダウンをしてコースを出る時、ある先輩とすれ違った。身長が十センチ近く違い、体格も全体的に一回りも二回りも大きい。左耳についた耳飾りは真紅のハート型だった。まわりの存在を意に介することなく威風堂々と歩く姿は、デビュー前のはずなのに王者の風格を感じさせた。

「いやあ、ジェンティルドンナさんはいつ見てもすごいなあ」

「ええ」

トレーナーさんともどもその姿に見とれていると、遠くから全力疾走してくる一人の女性の姿が見えた。

「くおら待ていジェンティル！」

その声が聞こえた瞬間、トレーナーさんがしかめっ面になった。

「先輩またやつてる……」

先ほどすれ違ったジェンティルドンナさんと契約している専属トレーナーさんは、私のトレーナーさんの先輩とのことだった。私達の存在に気づいていない風の速度で脇を駆け抜け、そしてジェンティルドンナさんに追いついて何やらまくし立て始めた。風に乗ってその内容が聞こえてきた。

「今日は室内トレーニングだつて言つたでしょうが！」

「あら。それなら今朝の自主トレーニングで必要量を済ませましてよ。貴方が提案したメニューの……そうね、このあたりまで進めましたわ」

「ウソデショ……」

「本当ですわ」

「ほへえ……、じゃなかった！ ここのコースの予約は!？」

「貴方がよだれを垂らしてトレーナー室のソファで寝ている時に、ふとロックが外れたままのパソコンが見えましたので、少々手が滑つてしまいました。うつかり予約システムに何かが打ち込まれてしまったかもしれません」

私のトレーナーが吹き出した。

「先輩……よだれ垂らして昼寝って……ククク……」

遠くではジェンティルドンナさんのトレーナーさんが地団駄を踏んでいた。

「ムキーツ！ 不正アクセス！」

「セキュリティには気をつけた方がよろしくてよ。おほほ」

ジェンティルドンナさんはいたずらつ子のような笑顔を浮かべつつ、全力で自身に近くトレーナーの身体を押し戻していた。

その笑顔にふと、心がむず痒くなった。

常識を超えたパワフルそうな先輩、それがあのジェンティルドンナさんと初めて直接対面したときの第一印象だった。今でもその印象は『そう』が取れただけで後は変わらない。いろいろ現在進行形で思い出が積み重なっていて、その中にはまあ、いろいろあるものの、本質はパワフルだった。

そして、ジェンティルドンナさんを見掛けたのはそれよりもっと前の話だった。

あれからもう一年が経っていた――

☆ ☆ ☆

中等部二年になって間もない頃のある日、上の妹のシュヴァルグラン――シュヴァルト、下の妹のヴィブロスがトレセン学園を見学したいというので、待ち合わせをして一緒に巡っていた。二人ともこの学園を受験する予定で、今は受験勉強やトレーニングを頑張っている。そのため、あと一年はこうして月一回くらいしか会えない日が続く。事あるごとに寮のルームメイトのホッコータルマエさんに悲しみを打ち明けていたら、いつしか笑顔で聞き流されるようになってしまっていた。とても申し訳なく思う。……でも、彼女も無意識だったとはいえ、耳が半分横を向いちやっているのを見た時にはちよつとへこんだ。

今日は妹達のために寮のキッチンスペースを借りてクッキーをたくさん焼いて持参して

いた。タルマエさんからクッキーに合うハスカップジャムを頂いたので、それも一緒に持ってきていた。

「うわーっ！ やつぱりトレセン学園って広くてすごいねー!!」

「ええ。広いトレーニングコースにプールやジムがあつて、あとはカフェテリアでいろいろ食べられるわ。この後行きましょうか」

「わーい!!」

「……やつぱり、ここはすごいな。……僕、もし受かったとしてもやつていけるのかな……」

シュヴァルが帽子に手を当てて引き下げつつ、物憂げに呟いたので、励まそうと思つて肩を優しく叩いた。

「大丈夫よシュヴァル」

「だいじょうぶだつてシュヴァち!」

ヴィブ罗斯はもつと派手に、シュヴァルをハグして励ましていた。やはりここは姉としてきちんとハグをすべきだろうか。

「そうかな……」

「大丈夫よ。毎日頑張ってるんだもの」

「そうだよ！ お姉ちゃんが言うんだから確かだよ。私だってシユヴァちならできると
思うもん！」

シユヴァルはまだ自信無さげだったけれど、しばらくしてかすかに頷いた。うなず

「さて、一通り巡ったところで、お昼ご飯前の軽いおやつタイムにしましょうか。ちよつとクッキーを焼いてきたの」

「ありがとーお姉ちゃん！ でもこの量は『ちよつと』じゃないと思う……」

「そうかしら？」

同じクラスで寮も同じヒシアケボノさんに二十センチ四方のタッパーでいいか尋ねたら
につこり笑顔で太鼓判を押してくれたのだけれど。それ一杯になるように焼いたのはさ
がに多かった？ でもシユヴァルはもくもくもぐもぐと食べていたらいつの間にか大きな
お皿が空っぽになるタイプの健啖家けんたんかだし……。

「余ったらお持ち帰り用に包むから」

「やったー！」

「……ありがとう姉さん」

ヴィブロスの元氣一杯の笑顔、シュヴァルの控え目な笑顔にちよつとした疲れが全部吹き飛んだ。なんなら魂までうつかり吹き飛びそうになった。

中庭のベンチに三人で腰掛け、タッパーを開けてクッキーをまずヴィブロスに差し出した。

「はい、ヴィブロス、あーん」

「あーん♪ ……うん、おいしいよお姉ちゃん！」

「良かった。シュヴァルもどうぞ、あーん」

「……姉さん、僕は自分で食べるから……」

ヴィブロスは応えてくれたけど、シュヴァルはいつも通り遠慮していた。せつかくなら食べさせたかったけど無理強いはいけない。昔無理やりあーんさせて食べさせたところ、口を利いてくれなくなったので三十分後に泣いて土下座した記憶が甦^{よみがえ}った。タッパーから流れるように自然な手つきでクッキーをつぎつぎ取って口に入れてくれているのでよしとした。

もきゅもきゅとクッキーを食べる妹達を眺めていたところ、ふと少し離れたところに誰

かが立ち止まっているのに気づいた。長身で体格そのものも大きいウマ娘で、左耳にハートの形をした紅い耳飾りをつけていた。こちらの方を見つめるように、どこか呆けたような表情で佇んでいた。

私達に何か用があるのだろうか。少し顔の向きを変えたところ、ちょうど目が合った。その人は驚いて視線を逸らし、足早に立ち去った。

「どしたのお姉ちゃん？」

「あ、ううん。なんでもないわ」

その時は彼女のことをすぐに忘れた。

座学の講義を受けたり、集団トレーニングをこなす日々を過ごしているうちに、少しずつ力がつきつつあるのを感じた。シュヴァルやヴィブロスからも、学園受験のための模擬試験で高得点が取れたという嬉しい知らせが届いたりしていた。

そんな中、週に二、三回ほど同一のウマ娘が視界をかすめるようになっていることに気づいた。学園の七不思議として伝わる『ウマ娘を遠くから見つめる怪異』かと思つてさりげなく姿を把握し、友人にその怪異の話を訊いてみたところ、背の高さや髪型、出現の仕

方が全く違っていた。……ひょっとして新手の怪異だろうか？

ある日、その怪異が視界の片隅に現れたタイミングでもう少しだけ詳しく姿を把握してみると、一月ほど前のことに思い当たった。あの時目が合った体格のいいウマ娘なのは。少し声でも掛けてみようと思つてそちらを見たところ、すでに姿は消えていた。

「何なのかしら……」

その後、彼女らしき人物に関する噂が学園で流れ始めた。いわく、トレーニングルームのエキスパンダーを引き千切^{ちぎ}つてしまつて理事長秘書のたづなさんに怒られていたとか、キックマシンが破壊されて使用不能になったのは彼女が渾身^{こんしん}の力で蹴りを入れたからだとか、砲丸投げトレーニング用の砲丸が最近急速に減っているのは彼女が握りつぶしているからだとか、およそ信じることができない中身だった。まるで怪異の伝承みたいに荒唐無稽^{こうむけい}な話ばかりで、彼女は本当に怪異なのではないかと思つてしまった。

ある日、部屋でホッコータルマエさんと話していた時に、ふとその怪異の話になった。

「タルマエさんは何かご存じですか？」

「うーん、私が聞いたことがあるのは、その方はこの栗東寮の先輩のジェンティルドンナさんだという噂話くらいかな？」

「ジェンティルドナさん……」

名前に心当たりはなく、寮で見掛けた記憶もなかった。

「今度探してよく観察してみようかしら」

「それがいいと思う。一番近くで見掛けた時はどんな状況だった？」

「あれはシュヴァルとヴィブロスと一緒に中庭でクッキーを食べていた時——」

その瞬間、タルマエさんの表情が『あ、まずい』と読み取れる表情で固まり、次いで苦笑いが浮かび、耳が明らかに横を向いた。

「——ごめんなさい。妹達のことになるとついうつかり長話になっちゃうから……」

「ううん！ いっぱいしてくれていいんだよ？」

タルマエさんが焦ったようにフォローしてくれたけど、あの表情を見てしまった以上、しばらくは控えなければ。

ある日、寮の廊下でジェンティルドナさんらしきウマ娘とすれ違った。お風呂上がりで耳飾りやメンコはつけていなかったし、当然髪も下ろした状態だったけど、雰囲気似ていたので、やはりあれは彼女らしいと思い至った。

すれ違つて二、三步ほど進んで立ち止まつて不意に振り向くと、同じように立ち止まっていた彼女と視線が合った。つまり、彼女も私と同じようにわざわざこちらを振り返っていたらしい。彼女はあからさまに狼狽^{うろた}えて、踵^{きびす}を返してそのまま角を曲がつて姿を消した。氣になつて角から覗^{のぞ}いてみたけれど、もうどこに行つたか分からなかった。

それから半月ほどの間、事あるごとにジェンティルドンナさんのことを探してみたけれど、今までとは打つて変わつて、まったく氣配がしなくなつた。ステルス能力が上がつたのか、それともウマ娘の視覚・聴覚の限界まで遠く離れたのか、はたまた諦めたのかは分からない。ただ、氣配が消えて逆にちよつと寂しく感じてしまつたのには我ながら驚いた。

だいぶ暑くなつてきた七月半ばの金曜日、今日は久々にシュヴァルとヴィブロスが遊びに来る日だった。さすがに炎天下にいろとつらいので、コースでの練習見学もそこそこに、早めにカフェテリアに向かうことにした。その時、やや遠くに四人ほど固まつて歩いているのに氣づいた。そのメンバーは、先頭がたづなさん、その次がおそらくトレーナーらしきヒト、背の大きなウマ娘、逆に小さなウマ娘だった。背の大きな人のことは大変見

覚えがあつた。

「ジェンティルドンナさん……？」

どこことなく、たづなさんが三人を逮捕連行しているようにも見え、心なしか三人ともやや足取りがふわふわしているようにも見えた。もしかして炎天下に長時間いて熱中症にでもなりかけていたのだろうか。

その後、カフェテリアで妹達とアイスに舌鼓したづみを打っている時に、離れたところに先ほどの三名が幽霊のような足取りで現れて、テーブルに突つ伏したのが見えた。その場所だけ空気のものがどんよりしているのが明らかで、何があつたか分からないけれど、普段見かけているよしみで励ましに行こうかと思つたら、別の人がそこに現れて何やら話し始めた。それからほどなくしてどんよりした雰囲気が消えたので良かった。

七月終わり頃に進路指導の一環として、トレーナーと、まだトレーナー契約を結んでいない中等部の生徒との交流会が開かれた。私のグループに来たヒト女性のトレーナーは都築楓つぎ かへでと名乗つた。交流会の話題は、契約を結ぶ時にトレーナーがいかにして育成する生徒を探し、その指導計画を立てるか、また、レースへの出走の決め方、レースの裏側、

レース引退後のウマ娘の進路など、この先を考えるにあたってとても役立つことがいっぱいだった。……もつと話を聞きたいと思った。

交流会の後、都築トレーナーに声をかけた。

「あの」

「へ？ あ、はい。なんでしようヴィルシーナさん」

「もう名前を覚えてくださったんですね」

「それはもうこの春から——ゲフンゲフン、生徒さんの名前は早めに覚えるよう努力しますからね。それで、どうか教えてくださいか」

「はい。今日のお話は大変興味深かったので、もう少しお話を聞きたいと思ひまして、お声掛けをさせていただきました。もしお忙しいようでしたらまたの機会でもかまいません」

その言葉に、都築トレーナーの目の色が明らかに変わり、さらに挙動不審になった上で早口で話し始めた。

「いや今すぐ大丈夫！ たった今大丈夫になった！ 他の用事は踏み倒……じゃなかったリスケするから！」

「……？　ありがとうございます。急に時間を取っていただいて」

なぜか妙に前のめりな都築トレーナーの後にについてトレーナー室に向かった。

結論から言うと、その場でトレーナー契約の『予約』が成立した。熱心な勧誘のほかに若干の泣き落としが入っていたような気がしなくもないけれど、せつかくの提案を断る理由もなかった。でも、一応選拔レースを突破する形で力を示してから本契約にしたいと申し出て、それをトレーナーさんが受け入れてくれたがゆえの『予約』だった。パパとママに報告したら週末に記念パーティーが開かれることになり、トレーナーさんも招待することになった。シュヴァルやヴィブロスも祝福してくれた。……一応まだ『予約』のだけ
れど……。

☆ ☆ ☆

「——シーナ？ ヴイルシーナさんや？」

「っ！ すみません、ちよつとぼーつとしてました」

「急に固まっちゃったからびつくりした。それじゃ、一旦トレーナー室に戻ろうか」

「はい」

そうして二人とも歩きだそうとしたその時、ちょうどジェンティルドンナさんの方に動きがあった。スタート地点から一気に加速し、その速度を落とさないまま坂路にアタック、そしてあつという間にコースを一周して帰ってきた。そのタイムを目測していた私のトレーナーさんが絶句していた。

「本当に坂路を走ってきたのよね……？」

「ええ……」

そして気づいた。

「ジェンティルドンナさん、息、全く上がっていませんね」

私の言葉に、トレーナーが再び絶句した。

「正直、あれでデビュー前だなんて信じられない」

「どうしてもっと早い段階でデビューしていなかったんでしょう？」

「さあ……？」

二人して固まっていたけれど、一陣の風に意識を引き戻された。

「ジェンテイルドンナさん、かなり有力な子ね。改めて注目しておかなくちゃ」
「そうですね……」

今度こそ歩き始め、トレーナー室に引き上げた。

第二章 運命の蒼に、思い焦がれ

『どうしてもっと早い段階でデビューしていなかったんでしょう？』

『さあ……？』

遠くにいる二人、ヴィルシーナさんとそのトレーナーさんの声が入った。

ヴィルシーナさんの問いに対する答えは『貴方が来るのを待っていたから』……というのは、百パーセントの理由ではないにせよ嘘というわけではない。その答えをヴィルシーナさんのトレーナーさん——都築トレーナーは知っているけれど、今の段階でバラさないでいてくれたことには感謝したい。

デビューが高等部になってからとなった理由の内訳は、本格化が比較的遅かったからと

というのが二割、彼女——ヴィルシーナさんとデビュー時期を可能な限り揃えたかったから、というのが八割だった。

なぜ中等部の特定の後輩と足並みを揃えようと思ったのか、初対面の時に開示しなかった本当の理由を今横でキャンキャンわめいている可愛らしいトレーナー——鹿島 藍トレーナーに話したら、真顔で『熱でもある？』と心配されそうなので言う予定はない。

トレーナーに対して話した建前の理由は『強そうな彼女と走ってみたくなったから』。トレーナーに対して隠した本当の理由は、彼女から目を離すことができなくなってしまうから。

レース面での潜在能力というより、より一層個人的な部分で。

そのはじまり、一年前のことが脳裏に甦った——

☆ ☆ ☆

新年度、春の選抜レースを間近に控えた時期に校舎から寮に向かっていると、中庭で三人の生徒が和氣藹々わきあいあいと話をしているのを見かけた。いや、そのうち小さめの二人は私服だった。どことなく小学生のようにも見えて、となるとこの学園の生徒ではなさそうだった。どことなく二人の姉のように見える子は中等部生のようにだった。

「はい、ヴィブロス、あーん」

「あーん♪ ……うん、おいしいよお姉ちゃん！」

「良かった。シュヴァルもどうぞ、あーん」

「……姉さん、僕は自分で食べるから……」

呼び方からして、やはり三姉妹らしい。一番年下のように見える明るい子はまわりを特段気にすることなくクッキーを食べさせてもらっていて、もう一人の子は帽子を目深まぶかにかぶって小さくなりつつ、タッパーからそつとクッキーを取ってちまちまと食べていた。

妹さんお二方は、お姉さんの通う学校見学のような感じでここに来ていたのだろうか。
甲斐かがい甲斐がいしく二人の世話をする長女らしき子の微笑みがまぶしくて。

ふと、この三姉妹がうらやましいと思った——思ってしまった。

私の家は父の方針により、兄弟姉妹間であつても実力をもつて勝負することを求められていた。いがみ合うような仲ではないにせよ、この三姉妹のように仲良く平和な交流を持つことはない。その必要もないと思つてゐる。それでもうらやましいという思いがよぎつたのは、一時の気の迷いだろうか。

気がつくといふ三姉妹の方を見つめてしまつていたらしい。その長女らしき子と目が合った。驚いてずっと目をそらして、そのままやや早足でその場を後にした。

寮に戻り、少し前に帰つてきていたらしい同室のブエナビスタさんにその子の特徴を話してみて、何か知つてゐることがないか尋ねたら即座に答えが返つてきた。

「その方はヴィルシーナさんです！ 私と同じ中等部ですね。二年生だったかな？ 同じ栗東寮生ですよ？」

「そうでしたか」

中等部二年ということは、昨年から彼女と同じ寮で生活していたことになるが、全く存在に気づいていなかった。学園の寮は栗東寮も美浦寮みほもかなり多くの生徒がいて、よ

ほど特徴的な子でもない限りは中等部の子を個別に認識することはなかった。

「ジェンティルさんが後輩さんを気にされるって珍しいですね。何かあったんですか？」

「……ええ。少々」

ブエナビスタさんの目がきらきらと輝いてもっと話を聞きたそうにしていたけれども、私としても話せることがこれ以上は特になかった。

私ももう高等部になり、少し遅めながら本格化の兆^{きざし}を感じ始めていた。学級担任との面談ではそろそろ選抜レースに登録してもよい頃合いだと勧められていて、なんなら選抜レース前ながら一件二件、トレーナー契約をしたい旨の非公式な申し出が舞い込んでもきていた。学園外の場面においても、『トウインクル・シリーズを駆け抜ける貴方を支えた』といったことをさらに齒の浮くような言葉に書き換えた交際申し込みが数多く届いていると、家の世話役から連絡が来ていた。そちらはすべて断るよう伝えた。

ヴィルシーナさんについて、学園で話を聞いたりしてそれとなく調べてみた。父親は現役の野球選手として大活躍中、母親はウマ娘で、アイドル的人気を博していたらしい。本人は三姉妹の長女、中等部の生徒で、本格化はまだのようだが、周囲の見立てでは来年頃

には本格化の域に達するのではないかとの見方があった。

彼女のことを考えていて、ふと邪念が湧き起こった。

何かしら理由をつけて、彼女と同じタイミングになるまでデビューをずらしたらどうなるか、と。

トゥインクル・シリーズへのデビューにはいくつか条件がある。ひとつはトレーナーがつくこと、もうひとつは、レースを走り切ることができるだけの身体能力を備えていること。どちらかが欠けるとデビューできない。学園の生徒は極めて多く、それでいてトレーナーは常に人材不足だった。不幸にして身体能力のピーク期にトレーナーが見つからなければ、レースで万全の力を発揮できない。

一方で、基礎能力が見込まれた強い生徒には数多くのトレーナーが殺到してレースプランのプレゼン競争が起きる。そして、私はおそらく後者にあたると自負していた。

つまり、トレーナーを選^えり好^{この}みするふりをして契約を意図的に遅らせるか、あるいはいつそ選抜レースへの出走自体を遅らせるという策を取っても十分勝算があった。とはい

え選手生命的には危険な賭けであることには変わりなかった。選り好みするふりをして、間に声がかからなくなる危険があつたし、完全なる私利私欲で特定の人とデビュー時期を揃えたいという本来の意図が明るみになれば、高い確率で学園の内外から大ブーイングが起きるに違いなかった。

それでも、賭けに出たくなつた。

何か、ここではない誰かの意志に突き動かされるように。

善は急げ。いや、善とはほど遠い邪よこしまな考えかもしれないけれど、思い立つてすぐに行動し、学級担任に意向を伝えた。

「春の選拔レース出走予定を取り消す、と？」

「ええ。懇意こんいにしている整形外科医から、脚部不安があるので慎重にトレーニングを重ねるべし、とのアドバイスを受けましたゆえ」

「なるほど。お医者様の判断ならば仕方ありません。出走取消手続はしておきますので、医師の指導に従い過ぎて下さい。相談事があれば適宜てきぎ、私や養護教諭、生徒育成

支援課の窓口を訪問してください」

「承知いたしました」

本格化の兆しがあるとはいえその域には達しておらず、当然ながら目立つ成績を上げていないのもあつて、選抜レースの出走取消は特段話題にはならなかった。この学園ではよくある話のひとつだった。

それからは、基礎トレーニングと座学を積み重ねつつ、ヴィルシーナさんの様子をそれとなく窺^{うかが}う日々が始まった。脚部不安説を使つて選抜レースへの出走を取り消した以上、カモフラージュのためにしばらくは強度を抑えなければならない。走れないフラストレーションは筋力トレーニングで解消した。その効果、あるいは代償として、学園内に敵^{かな}う者がいないほどの怪力が身についてしまった。学園にあるもつとも強いエキスパンダーをうっかり引き千切ってしまったり、キックマシンを破壊してしまったり、砲丸投げ用の鉄球を粉碎してしまったり、あるいは小さく圧縮してしまうほどの力になってしまったのは予想外だった。

夏を迎える頃には、集団トレーニングでの体力測定の結果が他の子よりも高くなり始めたため、トレーナー契約の誘いが増えてきた。そのたびにのらりくらりとかわしつつ、集

団トレーニングで同様に頭角を現しつつあるヴィルシーナさんを遠くから観察する日々が続いた。時折、妹さん方と一緒に仲良く学園内を散歩しているのを見ると心が和んだ。

そうしているうちに、同じように彼女を観察している不審者……もとい、同志(?)が二名いるのに気づいた。一人はウマ娘、もう一人は若手のトレーナーだった。ある日思いきつて声をかけたところ、ウマ娘の方はアグネスデジタル、トレーナーは都築楓と名乗った。それからは三人固まってヴィルシーナさんやその妹さん方を観察するようになった。

久々に晴れた七月半ばの金曜日、今日も毎週恒例の動きとして、植え込みの陰に三人で隠れて、妹さん方と三人で楽しそうに話しつつグラウンドを見ているターゲツトを観察していた。

「今更ながらお尋ねいたしますが、なぜトレーナーはヴィルシーナさんを追いかけていらっしゃるの? こうして頻繁にいらつしゃつていますが、トレーナーとしての業務があるのでは?」

我ながら本当に今更な質問だった。その質問に都築トレーナーはよどみなく返事した。

「ヴィルシーナさんには才能があるから、今のうちから観察しておきたいと思って。あと、トレーナー業は今が暇。春に教え子が卒業したばかりで、それまで休んでなかった分の休みをもらってるから」

「なるほど。休みを活用して観察したいほどに彼女には才能があると」

「ええ。そうよねデジたん？」

ずいぶんくだけたニツクネームで呼ばれたミニマムなウマ娘が、ヴィルシーナさんから目を離さずに頷いた。

「はい。あの御方には類稀なる才能があります……。十年に一度の逸材です！」

二人からそれほどまでに高く評価される彼女の潜在能力がとても気になった。

「お二方がそこまで高く評価する彼女のレースの才能、私も知りたくまりましたわ」

そう独りごちると、二人から斜め上の返答を受けた。

「ううん、違うよ？ 彼女のレースの才能はまだわからない。だって彼女、まだ集団ト

レーニングを始めたばかりだし」

「はい？」

予想外の言葉に思考が止まってしまった。しかしそれを許さないようにアグネスデジタ

ルさんが畳みかけてきた。

「そうですねえ。我々は確かに二、三か月間見ていますが、さすがにレースの才能まではわかりませんねえ。あたし達がヴィルシーナさんに見いだしている才能は『姉力』ですっ！」

「はい??」

姉力って、何?

「いかにも。ヴィルシーナさんには『みんなのお姉ちゃん』になる才能があるわね」

「……………はあ……………」

彼女達は大真面目に一体何を言っているのか。脳が理解を拒否した。

「あ、ヴィルシーナさん達が移動するみたい」

都築トレーナーの言葉に我に返って立ち上がった時、後ろから声を掛けられた。

「あのー、みなさん？」

その言葉にトレーナーがびくつと跳ね、軋み音でも鳴りそうな感じでぎこちなく振り向いた。

「あ、…………オハヨウゴザイマス、タヅナサン」

「ちよつと、理事長室までよろしいでしょうか？」

苦笑している理事長秘書に三人まとめて逮捕連行され、レモネードをご馳走になりつつ、ヴィルシーナさんストーキングの件で小一時間こつり絞られた。炎天下にいたせいで熱中症になりかけていたところは救われたが、お説教の最後に非情な宣告が下された。

ようやく解放され、三人揃つてとぼとぼとカフェテリアに向かい、揃つて沈んだ。

「うう……」

「ヴィルシーナさんへの接近禁止ですか……確かに当然といえば当然ではありますが……」

「ウマ娘ちゃんを怖がらせるなどデジタル一生の不覚……」

三人でテーブルに突っ伏して涙を流していると、近くに誰かが寄ってきてこちらに声を掛けた。

「楓、お疲れー。今度は生徒をストーキングしてボスからシメられたんだってね？」

「先輩……」

パンツスーツ姿の女性の上着の襟にはトレーナーバッジが輝いていた。都築トレーナー

の先輩にあたるトレーナーらしい。

「お二人さんも楓にくつついてるところやって巻き添え食うから気をつけなよ」

「はい……」

『巻き添え』というのは、こうやってトレーナーもろとも理事長秘書から説教されることを指しているのは確かそうだったが、先輩トレーナーの口調からは以前にも似たような事案があつたことが窺えた。とりあえずアグネスデジタルさんともども返事をしたところ、都築トレーナーが猛然と反論した。

「ちよつとそれどういう意味ですか先輩！」

「そのまんまの意味。どうする？ 生徒さんを前にして楓の悪行三昧あくぎようさんまいを開陳かいちんしてもいいんだよ？ たとえばスイーツ食べ放題大会事件——」

「申し訳ございませんでしたお許しください何でもしますから！」

都築トレーナーが五体投地で土下座した。事件の名前もさることながら、名前を出しただけで土下座したくなるほどにバラされたくない中身だったのだろうか。

「『何でもします』って言うところの学園では何でもやらされるからやめときな。トレーナー合宿研修の時の懇親会幹事こんしんかいとか面倒よ？」

「それは嫌なので別の言葉を考えます……」

「よろしい。そう言えばそこのお二人さんはいつデビューすんの？ 体格を見る限り誰かトレーナーがつけば全部すつ飛ばして今週末にでもメイクデビュー出られそうよね？ 福島と小倉こくらと函館はこだて、どこでデビューしたい？」

「そそそそそそのようなことは！ 我々がデビューだなんてそんな！」

「まだまだ力不足であると痛感しておりますゆえ、今しばらく研鑽けんさんしたいと考えております」

この先輩トレーナーの誘いを自然な流れで断ろうとしたら、にこやかな顔で思いがけないカウンターの攻撃を受けた。

「嘘つけ。実は昨日の体力テストの記録も知ってる。まだトレーナー全員には回ってないけど。二人ともあれだけ力があつて、それでもまだ力不足で出走を断るんだつたら、今選抜レースに登録を考えている生徒は全員門前払いよ。わざと出走を引き延ばそうとしている理由が何かあるんでしょ。ジェンテイル、ドンナさんとアグネスデジタルさん？」

名前がバレてしまっていた。もはやこのトレーナーには頭が上がらない。隠し立てしても無駄だと悟って、本当のところを話してしまった。

「なるほどねえ。ジェンティルドンナさんは今日までストーキングしてた子と一緒にデビューしたい、と」

「そう言われてしまうと、私が筋^{すじ}金^{かね}入りの変態みたいに聞こえて恥ずかしくなりますわ……」

言葉を聞けばどうしようもない存在で、しかも本当のことなので反論することもできなかった。

「アッハッハ！ 女子中高生にはよくあることよ！ ここの生徒も変わらない！ ……実はわりとあるのよ、好きな子に合わせたデビュー時期の調整。だいたいは選拔レース一期分とか二期分だから、たとえばケガや体力と全く無関係の事情が隠れていても学園側は別に何も言わないけど。さすがに知り合いですらない人相手に合わせて年単位で引き延ばそうつてのは貴方が初めてな気がするし、バレたら二者面談まっしぐらかも」

「そうですか。例が無いわけではないと聞いて少し安心しました」

「とはいえ、今の貴方のAクラスどころかSクラスの成績だと生徒育成支援課の職権で選抜レースに強制的に出走登録されるかもね？」

「うまく回避して、ヴィルシーナさんと歩調を合わせたいところですが……」

いかなる形にせよ、前例があるのだっただけでも理屈をつけて争う覚悟はできている。場合によつては『場外乱闘』学園外での権力行使をしても構わないとさえ思っていたが、それをするとな来の望みを達せられなくなってしまう可能性が高かった。

どうしたものか考え始めた時に、不意に目の前に手が差し出された。

「私と契約しない？」

「えっ？」

思わぬ誘いに今日何度目かの思考停止が発生した。それを知ってか知らずか、目の前の先輩トレーナーはよどみなく話し始めた。

「実は私、今はわりと暇なんだ。今月末で教え子が引退して生まれ故郷の高校に転校するから、来月一日からでよければ。デビュータイミングは貴方の希望を最大限叶える。貴方ならデビュー時期をずらしてもピークを外すことにはならなそうだし」

「……よろしければ」

「そ、じゃあこれで契約成立つてことで。あとで契約届を書いてもらったら正式に認められるわ。トレーナーの鹿島藍かしま あいよ、よろしく」

「改めまして、ジェンティルドンナと申します。よろしくお願いいたしますわ」

鹿島トレーナー——来月からの私のトレーナーと握手をしたところで、隣で固まったままの都築トレーナーとアグネスデジタルさんのことをようやく思い出した。

「アグネスデジタルさんは何でも屋の白江君のところに移籍した子だっけ」

「あ、はい……『仮所属』みたいな中途半端な立ち位置でもいいって言うてくださって……」

「白江センセのところならまあ大丈夫か。あのオジサンはいつぱいこき使ってやりなさい」

「はい……」

「そして楓、あの蒼のお嬢様とお近づきになりたい意志はまだある？」

「あるんですが、たづなさんから直々に接近禁止を申し渡されちゃいましたし……」

「あれね、第三者からの通報だからヴィルシーナさんはストーリーキングされてた事実には気づいてないってさ。たづなさんがきちんとメモを残してたし、私にもそう話してくれたから、これは確かな情報」

「そう……」

「だから今度偶然出会うようにセッティングしてあげる。楓からアタックしたら処分されるけど、あちらから自由意志で近づいてきたら問題なし。疑われないように細工もする」

「先輩……！」

「お代は駅前のパティスリーにある、季節限定フルーツタルト一ホールの現物払いね」「うぐっ……でもあの子に会えるなら安いもの……！」

都築トレーナーはヴィルシーナさんを誘う覚悟を固めたいらしい。是非とも頑張ってほしい。

かくして、ヴィルシーナさんストーリー……、コホン、『ヴィルシーナさんを見守る会』の活動は終了した。またしばらくは遠目にそれとなく眺めるだけの生活に戻るのだろう。

そう思つて季節がひとつ経たないうちに、あの事件に遭遇することになった。

第三章 ミニマム・ブルー・シンドローム

ある秋の日。私はヴィルシーナさんを探していた。

夏に理事^{たづ}長^な秘書^きから申し渡されたヴィルシーナさんへの接近禁止令は未だ解かれていない。だから直接会いに行くわけにはいかない。とはいえ、向こうからのきっかけがあればその限りではない。

実は二週間ほど前、たまたま彼女とすれ違った時に彼女が物を落としたので拾って渡し、その時に少しでも話をすることができた。『遠くから貴方の走りを見たことがある、結構速くて素晴らしい素質を感じた』的なことを話して名前を聞き出した。聞くまでもなく知ってはいたけれど。その時に私の名前も彼女に教えた。

偶然、短時間とはいえ話ができたことが予想外に嬉しくて妙に浮^うついてしまい、夢にさ

え出てくるほどだった。この嬉しさをブエナビスタさんに少々語り過ぎていたらしく、最近ではヴィルシーナさんの名前を告げた途端、につこり笑顔で耳が微妙に倒れ、右から左に聞き流すモードに明確に切り替わるまでに至ってしまった。

数日前にヴィルシーナさんとまた偶然出会って話をしたとき、彼女が私の名前を覚えてくれていた。それだけでなく、私の走りや筋トレを見てすごかったと、（おそらく）目を輝かせて褒めてくれた。その言葉を聞いて、危うくアグネスデジタルさんのように昇天してしまいそうになりつつも、どうにか平静を装った。

そして今日、今度はこちらから偶然を装って彼女に会って話をしようと初めて思い立ち、学園を一周したものの姿が見当たらなかった。諦めて帰ろうとしたその時、膝のあたりに何かがぶつかった感覚があった。

見下ろすと、布のかたまりがあった。……いや、よく見たら上から耳がぴよこんと出ていた。そしてしばらくして顔も出てきた。

「……どちら様？」

もちろんそれに対する返事はなく、小さい子はこちらをじつと見上げた。思わず心が揺れ動き、そのまま抱きしめたくなったので深呼吸をして心を鎮め、その子をもう一度見た

ときにはたと気づいた。髪のところのダイヤの模様。そして青髪。

「……ヴィルシーナさん？」

ふと思いついた人の名前を述べると、小さい子はこくと頷いた。その拍子に布のかたまりがずれ――

「っ！」

彼女の肌が余すところなくあらわになつてしまう直前で布ごと抱き上げた。布のかたまりをよく見たら、彼女の制服その他身につけているもの一式だった。

さて、どうしたものか。

学園のしかるべき場所――たとえば保健室、あるいは栗東寮りとうりょうに連れて行くべきだったが、現状の説明をするのがかなり大変そうだった。

少し考えていて、ふと思ひ出したことがあった。最近できたという、学園での困り事をひとまず引き受けてくれる相談所のことを、私の担当になった鹿島トレーナーが口にしていた記憶がある。相談所長と呼べる人はトレーナー歴八年の中堅どころの男性トレーナーで、たいいていのことは相談を引き受けてくれるだけでなく、解決までしてくれるとのこと

だった。この変人揃いの学園において、レース以外のことに心を砕いてくれるトレーナーがいるのはありがたい話だった。物は試し、その相談所らしきところへ行ってみることにした。

グラウンドのそばからその相談所のあるチームトレーナー室まで、この幼くなつてしまったヴィルシーナさんを連れていくのは困難を極めた。他の生徒やトレーナー、学園職員の間を盗みつつ、ようやくたどり着いた時には柄にもなく疲れてしまつていた。

扉をノックするとすぐに返事があつた。

「どうぞ」

「失礼いたします」

中に入ると、トレーナーらしき人が一人と、ウマ娘が一人いた。

「はい。……どうされましたか？」

「少々ご相談が」

そう言葉を発した途端、トレーナーが横にいたウマ娘を手招きして、後ろを向いて何やらひそひそ話をし始めた。いや、そこまで声はひそめていない。聞き耳を立てずともこちらまで声が届いていた。

「うちはいつから迷えるウマ娘の駆け込み寺になってしまったんだ？」

「おっちゃんの人徳だよ。誇つていい」

「最近お客さんばかりで仕事が終わらねえ……………」

あの男性トレーナーは本気で頭を抱えているようで、少々申し訳なくなった。

二人が後ろを向いていたのはその一瞬だけで、それからすぐに応接スペースに通された。トレーナーの方は席を立て湯呑み三人前と急須を用意し、お茶を淹れ始めた。ウマ娘の方は戸棚からガサゴソと茶菓子を取り出していた。……パッケージに『さわるな！
マックイーン』と庄の強い張り紙があったのは気にしなくて良いのだろうか。

「お待ちせいたしました。トレーナーの白江しろえと申します」

「ボスのゴルシウス百二十世じゃ」

「ボケるのはチームメイトの前だけにしような、ゴールドシップ」

「ちえー」

挨拶に面喰らって少し固まってしまったが、まずは名乗らねばならないことを思い出した。

「高等部一年のジェンテイルドンナと申します」

「ジェンティルドンナさんですね。……素晴らしい素質をお持ちとの話は常々耳に入っております」

「まだ無名の身ですが、過分な評価をいただき恐縮ですわ」

ここ最近はまだトレーナー契約の話が来なくなっていたものの、私の成績の話は伝わっているかもしれない。これに対してゴールドシップさんがウンウンと頷いていた。

「こんな強い奴が同じクラスだったらゴルシちゃん霞んじやうぜ」

「あら？ 貴方同じクラスでしたの？」

思わず声が出た。高等部一年で今のクラスになってすでに半年近く、今まで彼女の姿があっただろうか？ 思い返してみたが、このような長身長髪の子はいた記憶がない。何か勘違いがあるのではないだろうか。

ただ、ゴールドシップさんはその回答が大変気に入らなかったらしく、こちらに近寄ってきて、顔を近づけて睨みつけてきた。

「あん？ このゴールドシップ様の存在が目に入らないたあモグリだろ、やんのかコラ？」

そう言われても全く記憶にないのだから仕方がない。こちらが口を開こうとした時、後

ろの白江トレーナーがゴールドシップさんの腕を掴んで引き戻した。

「こら待て」

「なんだよもー、このタツパがデケえお嬢様にアタシの存在を刻みつけてやらねーとよー」

なぜだか分からないが、妙にイラつと来た。そちらの方が身長が高いのではないか。文句を言う前に頬をつねりたくなったところで白江トレーナーが続きの言葉を語った。

「その前にだゴールドシップ。この前教室に行ったのはいつだ？」

「三週間前。その前はそのままさらに一か月前。だからなんだってよ」

思わず『はあ？』という言葉が出てしまうところだった。まだレースに出ていないはずなのにほとんど顔を出していない不良生徒だった。これでは顔を合わせられるはずがない。

「ジェンティルドンナさんが直近で教室に来ていたのはいつでしようか」

「ちょうどそちらの……ゴールドシップさん？　がいらっしゃった時は、所用や遠征活動で数日不在にしていた時期かと」

「見事なすれ違いっぷりだな」

「あー……」

ゴールドシップさんはバツが悪そうな顔をして引き下がり、白江トレーナーの横まで下がってそのまましゃがみ込み、どんよりとした雰囲気漂わせて床にのの字を書き始めてしまった。

「……ゴールドシップのことはひとまず気にしないでください。ひとまず、ご相談があるとのことでしたね」

「ええ。ここまで貴方もゴールドシップさんも何一つツツコミを入れなかったのがいささか不思議ではありますが……私の横に座っている彼女のことです」

小さなヴィルシーナさんの背中に手を当て、ソファに沈み込みかけていた身体を起こしてあげた。姿勢を立て直したヴィルシーナさんはなぜか私の横にぴたりくっついてきた。心臓が今までにないほどに跳ねた。

「こちらのお子さんがどなたか心当たりはありますか？」

「ここの生徒ですわ。ヴィルシーナさん、中等部所属です。なぜかものすごく幼くなってしまうているのですけれど」

「ものすごく、幼く……」

「なんじゃそりゃ、アタシにもそんな特技はねえぞ」

白江トレーナーが固まり、いつの間にか復活していたゴールドシップさんも呆然として呟いた。……普通のウマ娘には小さくなる特技は無いのは当然のことでしょうけど。私もこの状況に対してはため息をつくしかなかった。

「グラウンドのそばを歩いていたら急にこの子が駆けて来ました。迷子かと思ったら違うようで、記憶もあまりはつきりしていない感がありました。それでいて姿だけは見覚えがあったので思い返して『ヴィルシーナさんかしら?』と問うたら頷いたので、どうしたものかと」

名前が聞こえたからか、ヴィルシーナさん（ミニ）のくつつく力がやや強くなった。なぜか心臓の鼓動が少し増して、顔が熱くなった。

「シュヴァルとヴィブロスはいないのか?」

「シュヴァル……さんと、ヴィブロス……さん?」

都築トレーナーやアグネスデジタルさんとともにいろいろとストーリー——コホン、観察をしている過程で知った、ヴィルシーナさんの妹さん達の名前がなぜかゴールドシップさんから出てきた。でも、妹さん達はまだトレセン学園には入学していないはずなのでは。私

の困惑した感情が伝わったのか、ゴールドシップさんは訝^{いぶか}しむような表情を見せ、それからはつとなつて小さい声で何やら口走った。

「あ、やべ、この時空だとまだあいづら小学生だわ、学園にいるわけねえ」

「……ゴールドシップさん？」

「いやなんでもねえ。忘れてくれ。じゃあ、ヴィルシーナの同室のホッコータルマエって知ってるか？」

「ホッコータルマエさん……ああ、昨日駅前^{とまこ}で苦小牧^{まい}の宣伝をしていらつしやった」

駅前広場で開かれていた小さなイベントで^{のぼり}幟を立て、元気な声で広報活動をしている姿を思い出した。

「そうそう。うちのチームメンバーなんだアイツ。おっちゃん、タルタルは今日学園にいるか？」

「いや。外出届を受け取った。とまこまい観光大使の仕事で今日から週末まで苦小牧に帰省している」

「おお……自室に預ける技が使えねえ」

ゴールドシップさんが頭を抱えていた。

「やはりここは寮で預かるのがいいかもしれない。ヴィルシーナさんは……栗東寮か。栗東寮の寮監^{りようかん}と寮長に連絡しよう」

「お待ちになつて！」

白江トレーナーが電話に手を伸ばしかけたので反射的に制止してしまった。

「どうしました？」

「ええ、その……」

反射的に止めてしまったので、その先の話を何一つ考えていなかった。ヴィルシーナさんの安全を第一に考えるならば寮の責任者のもとで適切に預かるのが最善なのは間違いない。でもなぜか、彼女を手放したくないという思いが浮かび上がって来てしまった。この場をうまく進める言葉は――

「……やはり、彼女は突然幼くなつてしまつておりますので、誰か見知った人がついてるのがよろしいのではないかと考えます。寮監の職員さんも寮長もお忙しい身、常についているのは困難かと存じますが」

出任せにしてはもつともらしい言葉が出てきて、しかも反芻^{はんすう}したらとても妥当な見解のような気がした。やはり幼い子がいきなり知らない人だらけの場所に置かれたならば、で

きるだけ彼女を知っている人、あるいは彼女が頼りそうな人がそばにいたことが望ましいに違いなかった。

「なるほど。もつともな話だ」

「幸い、私のついで彼女を安全に保護できる場所がありますので、関係各所にはその旨とこちらの連絡先をお伝えくださいませ」

紙とペンを借りて、ある場所の住所と連絡先を記し、白江トレーナーに渡した。

「ひとまず、おちヴィルシーナのこととはドンちゃんに任せると決まったとしてだ」

「ゴールドシップさん？ 彼女と私のことを奇怪な渾名^{あだな}で呼ぶのはやめてくださらない？」

「ええーなんだよー、……、失礼しましたサーイエッサー！」

「女性上官に対する呼び掛けは『ママ』よ」

「イエス、ママ！」

つい恐ろしいオーラを出してしまっていたかもしれない。いきなり顔面蒼白になって震え始めたゴールドシップさんのことは捨て置いて、白江トレーナーとの話を続けた。

「それで、今回の事態を解決するにあたってのアドバイスを頂きたいのですが」

「いや、さすがに身体が縮んでしまっていた案件はな……」

「いえ、そちらの問題は特に構いませんわ。おそらくいずれは元に戻るでしょうし。どちらかといえば……幼いウマ娘のお世話の仕方についてアドバイスを頂きたく存じます。また、その前に彼女に一時的に着せる服を調達して頂きたいのです」

「……分かりました。手配しましょう。ゴールドシップ」

「イエッサーおっちゃん！」

「俺相手には軍隊式はいらない。用品倉庫棟第三備品室、幼稚園児の体験講座向けトレーニングウェアと下着一揃いを持ってきてくれ。カードキーはこれ」

「あいあいさ〜」

白江トレーナーの指示でゴールドシップさんが出て行った。聞きしに勝る迅速な手配ぶりだった。

「素早いご対応ありがとうございます」

「いえ。生徒さんの困り事を解決するのは早い方が良さですから。特に今回は当事者のおひとりが幼稚園児相当と見受けられる状態ですから」

「ええ……」

隣にぴったりとくっついたままのミニmamなヴィルシーナさんを見下ろしつつ、次は彼女のお世話の仕方についての助言を乞うた。当初は指導者候補としてスーパークリークさんの名が上がったが、ちょうど戻ってきたゴールドシップさんが『アイツの教え通りにやったらおちヴィルシーナが永久にミニmamなままになるぞ!』と絶叫したので、何のこともよく分からないながらもスーパークリークさんを候補から外した。

結局のところ、幼いとはいえ食べる物に細心の注意を払ったり、専門的なアドバイスが求められるようなお世話は必要ではないということで、一般的なアドバイスを白江トレーナーからもらって実践することになった。

「保健室に問い合わせたら、ヴィルシーナさんには特に食物アレルギーのような注意を要するべき体質の検査結果は無いそうです」

「そうですか。安心しました」

「それでは、ヴィルシーナさんをジェンテイルドンナさんのところで預かっていることを、栗東寮の関係者に知らせておきます。ジェンテイルドンナさんの方から後ほど寮長に報告をしておいてください」

「承知いたしました」

報告のために白江トレーナーが席を外したところで、ヴィルシーナさんに身体のサイズに合った服を着せた。このミニマムなヴィルシーナさんはとても落ち着いている、というより、何やらかなりのマイペースささえ感じさせる佇まい^{たたずまい}だった。いろいろと声を掛けてシャツを着せたり、パンツをはいてもらったり、トレーニングウェアを着せたりした。その間、近くにいたゴールドシップさんは何かを観察しているような視線の動かし方をしつつもあまり興味無さそうに振る舞っていた。

「これでよし。きつかったり感覚が変だつたりするところはないかしら？」

私の問いかけに、彼女はこくと頷いた。とても愛らしい。思わず抱きしめたくなくて手を伸ばしかけたところ、その動きだけでなく心中まで見抜いたのか、ゴールドシップさんがツツコミを一突き入れてきた。

「おちヴィルシーナ相手にヘンな気起こすんじゃないぞー」

「……どのような心配をされているのか理解しかねます」

幸い（？）、それ以上の追及はなかった。

白江トレーナーが戻ってきたところで御礼を言い、ヴィルシーナさんを連れてトレーナー室を後にした。

学園を出る前に栗東寮長のフジキセキさんに連絡し、ゆえあつてヴィルシーナさんを数日ほどうちで預かる旨を伝えた。すでに白江トレーナーからの連絡を把握済みとのことで、話は早かった。さらに実家へ連絡を入れ、私の各種実務を補佐代行してくれている専属の執事に諸々の手配を頼んだ。念のため全ての用事をシャットアウトすること、さらに両親や姉弟、関係者から何か探りを入れても私の動きは口外しないよう要請した。

その後、学園の門の前からタクシーに乗って、目的地のホテルへ向かった。出迎えてくれたドアマンに挨拶し、部屋まで案内してもらった。すでに話は全て通っていて、希望した部屋に実家経由で手配したいろいろな物が届いていた。連絡から三十分も経っていないはずなのに、物を全て揃えるという、私の家に関わる人々の組織力には毎回ながら脱帽してしまう。将来彼らの身を預かり、先頭に立つてすべてを差配する者となるために心せねばならないことは多い。……今日これからはその心構えに反しそうな見通しだが目を瞑ってほしい。

「ふう……」

幼くなつたヴィルシーナさんにはベッドに腰掛けてもらい、無事、ミッションその一

『安全そうな場所にかくま匿え』を達成した。安全な場所なら他の選択肢でも良かったのだけれど、ミニマムなヴィルシーナさんと、こう……。いけません、邪心じやしんは微塵みじんもございせん。そういうことにしておいてください。

「ヴィルシーナさん、少しは落ち着くことができたかしら」

彼女はこくん、と頷いた。

「あなたの記憶がどのくらいあるか探りたいところだけれど、私の名前は憶おぼえていますか？」

今度は首を振った。となると、私とのわずかばかりのかかわりについての記憶も期待できなさそうだった。

「困りましたわね……」

困ったと言いつつ、ヴィルシーナさんには申し訳ないのだけれど、この状況を少し楽しんでる自分がいた。普段、学園や実業界で気を張っている中、突然降って湧いた休暇のようなものだった。このミニマムなヴィルシーナさんを護り抜くには細心の注意を払う必要があるものの、少しばかりの自信と威信、熱意に懸けてやり抜く所存だった。

「しかし、名前もよく知らない方について行くのは少々危なっかしいですわね。ヴィル

シーナさんとして親御さんからのつながりである程度は世間に知られている身の上、警戒心はいくら持つても持ち過ぎということはありませんわ」

その言葉にも、ヴィルシーナさんは首を振った。

「おねえさんのなまえは知らない。でも、おねえさんのことはみてしつてる。だからついできた」

「そうでしたの」

外見相応の幼さながらも、きちんとした芯を感じさせる声で返事をくれた。

「おねえさんのおなまえは？」

「ジェンティルドンナと申します」

「じえんちるどんな？」

かわいい。思わずヴィルシーナさんを抱きしめそうになった。もしかしたら噂に聞く、スーパークリークさんが他の方をいいこいこしたくなる時の心の内とはこのようなものなのかもしれない。

「じえんちるおねえさん、なきそう？ どこかいたい？」

いつの間にかこちらを見上げていたヴィルシーナさんが心配そうな声で尋ねてきたので

急いで否定した。目元をぬぐうとなぜか涙がにじんでいた。

「いえ、何でもありませんわ。しかし、どうしたものかしらね」

とりあえず、先ほどのチームトレーナー室を出る間際にゴールドシップさんから吹き込まれた秘伝その一『彼女を抱き上げて自分の膝に座らせる』を実行してみた。するとヴィルシーナさんは大人しく私の前にちょこんと収まってくれた。

とてもかわいい。彼女を護ってあげたいとの思いを新たにした。

ふと思いつて、ちょうど良い高さに来ていた彼女の頭の上にあごを乗せてみた。ぴったりフィット。かわいい。でも『おねえさんやめて』と言われたのですぐにやめた。とても愛らしい。かわいさポイント一万点。お姉さんと呼んでくれたのでポイントプラス百万点。このような振る舞いは、元のヴィルシーナさん相手では実現はとても難しい。中学生と高校生でこのような関係性を築くとしたら、よほど親密にならないといけない。

ミニマムなヴィルシーナさんを堪能たんのう(?)していると、不意に質問を受けた。

「じえんちるおねえさん」

「どうしましたの？」

「おねえさんって、つよい？」

「……そうね。まだわかりませんわ。でも、強くなるための道を着実に歩んでおります」

「ふうん。わたしもつよくなりたいな」

貴方ももう強くなりつつありますのよ、と教えようと思つて、せっかくならちよつと先生を氣取つてみたくなつた。

「良い心がけね。そのためには、まず進むべき目標を明らかにささい。その上で目標に向けて歩むとよろしいかと」

「わかつた」

そこまで言うとは、ミニmamなヴィルシーナさんは私の膝からぴよこんと飛び降り、私の方を見てピシッと指差した。

「じゃあ、つよそうなおねえさんよりつよくなる！」

幼い姿ながらも闘志を燃やす姿に、やはりこの子こそが私のレースにおける最高のライバルだと確信した。

「——よろしくてよ。ただ、簡単には追い越させません」

「わたしもまけない。かつ」

視線がぶつかって火花が散る、とはこの感覚だろうか。彼女には決して負けないと改めて誓い――

「だからよろしくね、じえんちるおねえさん！」

「~~~~~つつつつツツツ！！」

誓ったそばから敗北した。思わず全力で抱きしめかけて、それだと彼女が大ダメージを負ってしまうことに気づいて軽くハグをした。

それからは部屋の中でできるゲームなどをしたり、調達してもらった本を読んだりして過ごした。恥ずかしながら、誰かを相手にしたゲームというものを全くしたことがなかったのも、うろ覚えの知識でトランプを扱ってみたい、逆にヴィルシーナさん（ミニ）から教えてもらってゲームを進めたりした。読書は、最初のうちはそれぞれ静かに読んでいたけれど、途中でふと読み聞かせというものをしたくなったのでしてみた。ヴィルシーナさんは静かに私の語りを聞いてくれた。

夜。部屋備え付けのバスタブにお湯を張ってヴィルシーナさんと一緒に入った。これも彼女が幼稚園児レベルのミニマムなサイズだったのでできたことだった。もし元の中学生

サイズだったら……おそらく正気を保てず、鼻血とともに意識が昇天してしまうに違いな
い。今も実はかなり精神が揺らいでいたけど、なんとか耐えた。

そしてせつかくだからとか、たとえ本当は中等部とはいえ小さい子を離れたベッドでひ
とり寝かせるのはかわいそうだとかさんざん内心で言い訳をしながら、ひとつのベッドで
寝た。ダブルサイズはあるので余裕だった。……が、私の方に少々アクシデントがあっ
た。彼女を寝かしつけたところで私もその隣にもぐり込んだところ、彼女が無意識か、
それとも寝ぼけていたかして、私の方にくつついてきた。そして寝言をぼつりとつぶや
いた。

「……じえんちるおねえさん……だいすき……」

「！」

思わず涙が出て、そして鼻がつん、とした。鼻水が出てしまつてははしたないと思っ
て、ひとまず鼻の下に指を当てて身体を起こした。……何やら様子が変だった。指を鼻の
下から少し離して、それから慌てて戻した。

「鼻血……」

なぜに。

うっかりのぼせてしまっていたのか、それとも無意識のうちに変なことを考えてしまっていたのか。

その姿はただだとても間抜けで、あるいはある意味無様^{ぶざま}で。

他に誰も見る人がいない中、血が止まるまで鏡の向こうの間抜けな自分とにらめっこする羽目になった。このような変な顔は家の者や関係者のみならず、同室のブエナビスタさんにも見せるのがはばかられた。もちろんヴィルシーナさん相手にも。血が止まってからまたきちんとヴィルシーナさんの隣で寝直した。

☆ ☆ ☆

目が覚めた時、上に重みを感じた。さらに言えば何やら柔らかいものが間に挟まっている感覚もあった。まるで中学生の女の子でも上に乗っかっているような――

「――っ!？」

本当に乗っかっていた。ちょうど顔が私の胸に埋まり、耳が口元に来るあたりにいた。この部屋に私以外の子はひとり。ヴィルシーナさんだけだった。

どうにか身体を起こしてシーツをめくって彼女の方を見た時、危うくまた鼻血を垂らして気絶してしまうところだった。幼稚園児サイズだったはずの身体が元の中学生サイズに戻ってしまい、その過程で脱げてしまったらしき服は彼女の身体の横に添えられるように固まっていた。すなわち、一糸^{いっし}纏^{まと}わぬ姿だった。

こういう時はどうしたらいいのだろうか。やはりここは私も服を脱いでから——と思考が暴走して慌てて首を振った。ただでさえ私の方も薄めのネグリジェだけなのに、さらに脱いだ状態でヴィルシーナさんが目を覚ましたら今度こそ一巻の終わりだった。面識があるとはいえまださほど交流がない先輩と同じベッド、同性どうしとはいえお互い裸、しかもそこに至る前の記憶は不明瞭……どう考えてもイヤラシイ既成事実を作り上げようとした危険人物でしかない。下手したら法廷に送られて、さらに彼女にも永久に会えなくなるかもしれない。どうすれば。

A. 彼女が起きないようそつと抜け出して制服に着替える。

B. 彼女を起こしてから事情を説明する。

C. もはや捕まる道しかない気がするのでこの際彼女が目覚めるまで抱きしめておく。

……綱の意志を貫徹しなかつた私の弱さを許してほしい。元の通り横になつて、元の通り彼女の顔が私の胸のあたりに来るよう少し引き上げて、彼女の背中に手を回した。

自分の心臓が早鐘を打つていて、幸せのまま氣を失いそうになつていた。

もし家族、あるいは彼女に出会う前の私がこの光景を見たら、淡々と私を無力化し、家から追い出して絶縁するに違いない。ただの無力で孤独な未成年ウマ娘として破滅するならば、いつそこのまま彼女と思いを遂げ——いや、それは絶対にいけない。少々どころでなく思考がおかしくなっている。落ち着かなければ。

氣を持ち直してとりあえず彼女を自分の身体の上から横に移した。そして、ひとまず彼女にブランケットを掛けようとしたところで、彼女が身じろぎし、そして目を開けた。

「……ん、んう……あれ……？ ……えーっと、貴方は確か……」

どこことなく眠そうな誰何の^{すいか}声に動揺して、とりあえず居住まいを正して名前を告げた。

「ジェンティルドナと申します」

「あ……はい……え」

寝ぼけ眼の彼女が身体を起こし、不思議そうな顔をして自身の身体を見つめ、悲鳴を上げるまでは一瞬だった。

「どっ！ どどどどどどどうしてわたしはだっ！ はだかつ!?」

あまりものの彼女のパニックぶりに、私の方もさらに動揺してしまった。一から説明しようと思つたら小一時間は掛かつてしまう。ここはまず落ち着かせなければ。とりあえず、彼女を自分の方に抱き寄せて話しかけた。

「話せば長くなりますが、とりあえずは……何ともない一夜でしたわ」

口にしてみても、誤解を招きかねないとてもまずい表現になつてしまつていると我に返つた時は手遅れだった。

「い、いち、や、あ、……、——ヘンタイッ!」

「痛ッ!」

ばちん、と私の左頬から音が響き、激痛が走った。

声を震わせたヴィルシーナさんが私をビンタしたと気づくまでに少々時間を要した。そして弁解する前に彼女は目を回して気絶し、ベッドに倒れ込んでしまった。

「……申し訳ありません」

左頬の痛みと共にこぼれ出た言葉は、もちろん彼女には届かなかった。

氣絶してしまったヴィルシーナさんに、彼女の今のサイズに合った下着と制服を着せ、またベッドに寝かせて、部屋の片付けに入った。彼女が元通りのサイズに戻った以上、ここにとどまる必要はなかった。彼女が意識を取り戻し次第まずは謝り、弁明を試みなければならぬ。

考えながら片付けをしていて、ふと立ち上がった瞬間両肩に手が置かれ、振り向かせる方向に力がかかった。そのまま後ろを向く形になり、視界に怒気を立ち上らせたヴィルシーナさんが映った。肩に置かれた手にさらに力が加わり、カーペットの上に正座させられた。彼女がこちらを見下ろす目は今までの誰のものよりも怖かった。

「ヴィルシーナさん、どうかお話を」

「うるさいっ」

発言しようとした瞬間、初めて見聞きする乱暴な口調で一刀両断された。……これはもう、終わったかもしれない。両親や姉弟、私を知る取引先の人間が見たら正気を疑われる

のは間違いないが、土下座するしかない。頭を下げかけたところで、ヴィルシーナさんから厳かな声おごそが発せられた。

「まず、何がどうなつて私がここに運ばれてきて、どうして裸になつていて、隣にジェンティルドンナさんがいたのか教えてちょうだい」

「はい……」

身体全体から威圧のオーラをにじませ、この事態の犯人を侮蔑おべつする冷え冷えとした口調のままながら、私の話を聞いてくれることになつたらしかった。彼女から蔑みさげすの目で睨まれたままなのはとてもつらいので、ほぼすべてを包み隠さず話した。……ただ、彼女に対する「並外れた『好意』」については伏せた。

「私が小さくなつてしまつていた？」

「はい……とても可愛らしい幼稚園児くらいのお子さんサイズになつていらつしやつて、私の膝にちょこんと乗る感じの大きさで、抱きしめるとほどよい感じに収まつて温かくて」

「そこまで聞いてない」

「はい……」

余計なことまで話してしまつて、ヴィルシーナさんの視線の温度がますます下がつてしまった。顔が赤くなつてゐるのも見えた。

「はあ……なんでホテルに連れてきたのよ……私もあなたも栗東寮なんだからとりあえず寮に行けば良かったんじゃないの？」

「その発想は……アリマセンデシタワ、エエ、コレッポツチモオモイツキマセンデシタ」
「棒読みになつてゐるわよ」

彼女の口調はぞんざいなままで、まるで同い年の相手に喋るような感じだった。落ち着きを取り戻してゐるように見えて、まだかなり混乱してゐるらしい。

普通の状態なら、後輩からこのような口調で話しかけられ続けたら適當なところで鉄球圧縮でも披露して威圧するところだったが、お説教を受ける身という今の立場を抜きにしても口調を訂正する気にはならず、逆になぜか心地よい感じがした。

さて、うっかり棒読みになつてしまつていたことと、その時に少し視線をずらしてしまつたことがもの見事に見透かされていて、致命的な突っ込みを受けることになった。

「下心でもあつたの？」

「それは……」

イエスと答えたら『もしもしポリスメン?』コース、ノーと答えたら今までの行動との矛盾が大きすぎて詰むコース、いずれにしても詰みだった。今までのビジネスや社交の現場で丁々発止ちんちゃつていしのやり取りをしてきた経験がまるで役に立たない。今度こそ土下座して赦ゆるしを乞こうしかない。構えたところでヴィルシーナさんの方が話を先に進めてくれた。

「いいわ、表情が十分語ってくれてるからもう聞かない。で、何しようとしたの?」

「……ヴィルシーナさんと、もつと仲良くしたくて……」

その言葉を出した瞬間、彼女は大きなため息をついた。

「何でそれでこんな誘拐ゆうかいまがいの行動につながったのか全く理解できないのだけれど。仲良くするなら普通に声を掛けなさい。いい? お姉ちゃんとの約束よ?」

「はい……」

年下の子から説教されているという状況からさらに進み、もはや姉に諭さとされる妹そのものになってしまっていた。

ヴィルシーナさんはホテルの近くにある実家に一旦立ち寄るとのこと、私は独りで寮へ帰った。別れ際に『それでは、また学園で』と言われたことは救いだった。

☆ ☆ ☆

翌日、寮の食堂スペースでヴィルシーナさんにたまたま出会い、その時に申し訳なさそうな顔で謝られた。

「昨日は申し訳ありませんでした。突然のアクセシデントの時に助けていただきながら、気が動転してジェンティルドンナさんをひっぱったり、先輩なのに乱暴な口調で問い詰めたりしてしまつて……」

「いえ、あれは私の軽率な行動と言動が招いてしまったことですので、全責任は私にあります……」

お互いに頭を下げることにし、私の方からひとつ提案した。

「罪滅ぼしといってはなんですが、お時間がありましたら今度一緒に併走トレーニングをいたしませんか？」

「いいんですか!? ジェンティルドンナさんはいつ見ても力強い走りをしていらつしやるので、機会があれば一度併走を試みたいと思つていたところでした」

快諾を受けて、思わずヴィルシーナさんの手を取つて踊りそうになつたところで自重した。

ちょうど二人揃つてゐるよい機会だったので、今回お世話になつた白江トレーナーに御礼を言うために例のチームトレーナー室を訪問した。

「失礼します」

「ようこそゴルシちゃんズルームへ、……………おう」

出迎えの第一声はあの長身のふてぶてしい奇怪なウマ娘・ゴールドシップさんだった。しかしいきなり真顔で低いトーンになつたのはなぜだろうか。白江トレーナーはその後ろの席にいたが、こちらを見て一瞬戸惑つた様子だった。中学生の姿に戻つたヴィルシーナさんを見るのが初めてだったからかと思つたら、その表情と続く言葉からそれだけではなさそうだと分かつた。

「ジェンティルドンナさんと、ヴィルシーナさん、ですね? 間違ひなく……………?」

「ええ、間違ひなく私です」

「そうです……」

なぜか、つい二日前に会ったばかりの私に対しても本人であるか自信が持てていない様子だった。そこまで外見が変わってしまっているはずはないのだけれど。

「おいおいお前らどうしたんだよ、一昨日昨日今日でこのゴールドシップ様に黙って大人の階段を百段くらい登っちゃったみたいな雰囲気醸し出しちゃってよー」

大人の階段——その言葉が耳に入った瞬間、急に恥ずかしくなってしまった。我ながらここまで動揺してしまうとは思わなかった。隣のヴィルシーナさんの様子を窺うと、頬を紅く染めてうつむいていた。

「二人揃って来たということは、突然小さくなった問題は解決したとみていいのかな？」

「ええ。その節はありがとうございました」

「ご迷惑をおかけしました」

白江トレーナーからの状況確認に揃って頭を下げた。トレーナーは穏やかな笑顔で返してくれた。

「お気になさらず。学園の生徒を最大限支援するのがトレーナーの務めですので」

「ありがとうございます」

帰り際、ヴィルシーナさんが先に部屋の外に出て、私も出ようとした時にゴールドシツプさんに呼び止められて耳打ちされた。

「忠告したのにおちヴィルシーナ襲っちまったのかよオメー」

「そのようなことはございません！　いろいろあったのはもとに戻った時ですしそれもほとんど何もできませ……あ」

「語るに落ちたなドンちゃん！　偉そうなオツサンオバサンたちといつもバチボコやりあつてゐてえなふてぶてしきで堂々とイチャイチャできるよう頑張ゴフオツ！」

ニヤニヤしながら煽^{あお}つてきたゴールドシツプ^{コシツプ}さんのお腹に拳^{こぶし}を叩き込んでチームトレナー室を後にした。……なぜ彼女が学園外での私の振る舞いについて見てきたように話すのかよく考えれば不明だったけれども、この時は気にしている暇がなかった。

「何かあったんですか？　部屋の中から先ほどのウマ娘さんのうめき声らしき何かが聞こえてきているのですが……」

「豆腐の角に頭をぶつけたのでしょ」

「は、はあ……」

釈然としない顔のヴィルシーナさんの先に立ち、手を差し出した。

「それでは参りましょうか」

「……はい、ジェンテイルドンナさん」

「フルネームで呼ばれると少々堅苦しい気がいたします。ぜひとも好みの愛称にてお呼びくださいませ」

「いいんですか？」

「ええ。妹たるもの、姉の思し召しには従いますわ」

昨日のお説教のことを出してみたらその時の言葉を記憶していたらしく、ヴィルシーナさんの顔が真っ赤に染まった。

「昨日のは忘れてください……」

「いえ。なぜか少しだけ嬉しい気持ちになりましたから。私が三人姉弟の真ん中で、妹のような存在でもあるからかもしれないません」

「そうでしたか。でも忘れてください……」

「それは残念……」

ひとつ、ヴィルシーナさんに聞いておきたいことがあった。

「そういえば、幼くなっていた時のことは記憶にありますの？」

「いえ。なぜかほとんど記憶に残っていないくて。でも、背中から抱きしめられていた感覚は覚えて、その時は心も身体も温か^{あたた}かった気が……、すみません、言つててちよつと恥ずかしくなりました……」

「奇遇ですわね。聞いていて恥ずかしくなりました……」

トゥインクル・シリーズへのデビュー予定は、現在の実績だと目論見^{もくろみ}通りヴィルシーナさんと同じ時期にできる予定だった。選ぶ路線によっては、この愛らしい後輩と直接対決することになるだろう。それはとても楽しみなことだった。

そして、もし叶うならば、ライバルとして激しい勝負をしてもオフの場面ではこうして仲良くしていきたい。できることならもつと親密に——いや、そこまで考えるのはひとまず後回しにしよう。まずは併走トレーニングに向けて備えることにした。

間章 僕の姉さんと、その友達らしき人について

姉さんは、すごい。その思いをずっと持ってきた。

僕が目指す『偉大なウマ娘』になるために、目標とすべき——そして超えないといけないのは姉さんだと思う。姉さんはまだデビュー前だけど、聞く限りではとても力があるらしい。姉さんは『そんなことはないわ。まだまだトレーニングをして強くないと』と控え目なことを話しているけれど、姉さんから聞いたタイムを母さんに伝えたら、ジュニア級でもトップに近いタイムだと教えてくれた。

そんな姉さんに、新しい友達が増えたみたいだった。

ヴィブロスと一緒にトレセン学園に行つて姉さんに会いに行つた時、噴水の近くで姉さ

んが長身のウマ娘さんと会話をしているのが見えた。姉さんが僕とヴィブロスに気づいてこちらに手を振ったタイミングで、その人は去って行った。

「シュヴァル、ヴィブロス、元気だった？」

「つい三日前にビデオ通話したばかりだと思うんだけど……」

「先週はうちに帰ってきてくれて一緒にごはん食べたじゃん！」

「三日間は人を変えてしまうのに十分過ぎる時間なのよ」

姉さんが心配そうにこちらを見つめてきた。姉さんが寮暮らしになってからというもの、僕達のことを心配し過ぎるようになったんじゃないかとよく感じるようになった。姉さんの友達にも僕達のことをいっぱい話しているそうなので、そろそろウザがられていないか心配だ。それはさておき。

「ねえねえ！ さっき話してた背が高いお姉さんはナニモノ？ 新しいお友達？」

僕が聞こうと思っていたことをヴィブロスが先に口にした。それに対する姉さんの答えは歯切れが悪かった。

「え、ええ。そんな感じ」

「……ふーん？」

それに何かを察したらしいヴィブロスはニヤニヤしながら引き下がった。

それからいつも通り学園のトレーニング風景やダンスレッスンの光景を見つつカフェテリアに行き、飲み物を取ってきてみんなで飲みつつ喋っていると、いつの間にか遠く離れたところにさっきのウマ娘さんが来ていた。一人で優雅にお茶を楽しんでいるように見えた。……でも、よく見ると耳がこちらの方に向いている気がしなくもない。僕達の方の会話を聞き耳を立てている？ まさか。

ふと、そのウマ娘さんと視線が合った。すると明らかに動揺して、ギクシャクした動きで席を立て去って行つた。

「……？」

「シュヴァル？ どうしたの？」

「あ、ううん。なんでもない」

家族で話しているから、話しかけたくても遠慮していたのかな。

帰り道。ヴィブロスとの会話でそのウマ娘さんの話になった。

「ねえねえシュヴァち、お姉ちゃんとお話ししてたあのお姉さんんだけど」

「うん。結構仲良さそうな感じだった。新しい友達かな」

思ったままを答えたら、ヴィブロスは首を振った。

「そんだけしか思わなかったの？ シュヴァちはにぶにぶさんかな？」

「にぶにぶってなんだよ……」

なんだかバカにされたような気がしてむっとなったら、ヴィブロスがチツチツチツ、と指を振ってから僕を真っ直ぐ指差してきた。

「あれはねえ、ラヴだよ」

「ラヴ？」

「そ。お姉ちゃんからあの紅いお姉さんへは特に何ともなさそうだけど、その逆はラヴ度百くらいありそうな感じかな？」

いや、まさか。そもそもウマ娘どうしがラヴって何なんだ……？

「その顔は信じてない顔だねシュヴァち。これから良く見るといいと思うよ？ ラヴだつてわかるから！」

「うーん……」

そんなことがあるのかと思いつつ、駅に着いたらちょうど電車が来そうだったので早足で改札を通過してホームに向かった。まあ、今度会った時に改めて観察してみようと思った。

（『蒼と紅』第四章へ続く）

あとがき

はじめまして。あるいはお久しぶりです。麦（穀物P）と申します。

当作品は、ちょうど一年前の二〇二四年九月から書いているジェンティルドンナさん＆ヴィルシーナさんのカップリング（ジェンヴィル）で書いている連作的作品『蒼と紅』を本の形にしてみました。冒頭的大幅加筆をしつつ再編したものの第一巻となります。

書こうと思ったきっかけは記憶の彼方となつてしまいました。が、おそらくは pixiv でジェンヴィルがテーマの琴線に触れる作品に出会ったからだろうと思われます。当時はジェンティルドンナさんが育成実装されたばかりのピックアップガチャ期間中でしたが、懷事情ゆえ天井ができないので、家からそこそこ手頃な距離にある Cygames の佐賀スタジオにジュエルを五六億個配布するよう直訴に行きたがっていたと記録されています。

連作一本目は当初は単発もののつもりだったので、キャプション欄に

『ゲームストーリーの内容を伝え聞くあたり、ジェンティルさんはいつでも堂々としてい
そうなのでこの話のようにはなりそうありませんが、『なんと、今回の二次創作に限り
……!』の通販セールの精神でお許しください」

などと書いておりましたが、結果はDrawをご覧くだされば分かるかと思われます。

当作品は例によって、二人のベースの関係をゲームストーリーから大幅に改変しています。キャラクター個別ストーリーや育成イベントでは序盤からジェンティルドンナさんとヴィルシーナさんがバチバチやりあっていますが、こちらはモチーフとなっているお馬さんの史実的経緯を参照しつつ砂糖の山を読者に食わせるため、初手から関係性も性格も変わっています。正確には『ゲームストーリーでは割愛されている（と思われる）、桜花賞の前の時期までの流れを独自解釈で反映した』という感じです。

関係性を変えた、すなわち初期における両者の対抗心をゲームストーリーと比較して大

幅に弱め、むしろ仲良くする方向性に持っていったのは、当時の競馬メデイアの各種記事やコラムから推測した当時の関係性によるものです。

育成段階からデビュー、条件戦、GⅢの過程では両陣営とも素質があるとの手応えを得ていたようで、現に強さを示す結果を両者とも見せています。とはいえ、この段階ではこの二頭だけが群を抜いて圧倒的に強い状態ではなく、阪神ジュベナイルフィリーズ勝者のジョウドヴィーヴルさん、同二着およびフィリーズレビュー勝者のアームユアーズさんなど好成績のお馬さんが複数いて、予想家や研究家も一目置いてはいても、ガチガチに注目が集まる様子でもなかったようです。その点からも、両者間に『格別に注目すべきライバル』という関係性が生まれたのは、早くとも桜花賞の後、オークスの前の期間中なのではないかと考えました。

また、当時の各種記事や、六月頃にノーザンファームから公開されたジェンテイルドンナさんに関する育成時のコラムから見ると、最初の頃はジェンテイルドンナさんもヴィルシーナさんも、どちらかと言えば大人しいというか、騎手が促してはじめてスイッチが入るようなお馬さんであつたそうです。そちらも反映してどちらも穏やかさ千倍増しに（変化してシリーズを書いたことを正当化）しています。

ウマ娘内でもシリーズ物複数、別ジャンルでも並行執筆するなど多正面作戦の様相を呈しておりますが、順次書き進めますので引き続きどうぞよろしく願います。

麦（穀物P）

蒼と紅 1

著 者：麦（穀物P）

発行元：麦之穂

サイト： <https://muginoho.ehoh.net/>

連絡先： circle_muginoho@aotake91.net

発行日：二〇二五年（令和七年）九月 七日

印刷所：ちよ古つ都製本工房 (<https://www.chokotto.jp/>)